

コリント人への手紙第一 第1章 31節

「まさしく、『誇る者は主を誇れ』と書いてあるとおりです。」

私たちに誇るお方がいることは幸いだ。誇りは生きるちからとなり、生きがいともなる。ところが、場合によっては、この誇りが争いをもたらし、破滅的結果をきたすことがある。それが、たまたま起こるというのではなく、日常的にある。

例えば愛国心を煽り、国への誇りを駆り立て銃器を手に闘いに向かわせる。例えば、国旗掲揚を促し、他の国とは異なる、より優れていることを現すように鼓舞され競争の場に立たされるのはどうだろうか。相手を打ち負かし、その誇りに自国の価値を、自分の存在価値を持つとうとすることの落とし穴はどこにでもある。

他方、国々に与えられた価値、人々に与えられた才をベストに活かし、それぞれの存在意義を発揮し、それを誇るの悪い事ではない。むしろ、与えられたいのちを十分に生きることでは喜ばしいことだ。しかし、この誇りを実現することが、他者の、他国の誇りを踏みにじり、破滅させることによって成されるようなものであったら否である。

誤った誇りを求めがちな者に言われる。「誇る者は主を誇れ」と。

2023年3月11日（東北大震災12年後の日）